

稲沢市・法華寺所蔵の2体の明王像について

見 田 隆 鑑*

Myoo Statues at Hokke-ji Temple, Inazawa-shi, Aichi Prefecture

Takaaki MITA

はじめに

本稿で取り上げる作品は、稲沢市法花寺町にある曹洞宗寺院・法華寺が所蔵する2体の木造明王立像である。この作品については、従来から法華寺に所蔵されていることは確認されていたが、尊像の保存状態の問題もあり特別に資料紹介されることがなかった。

この作品を明王像としてではなく、十二神将像の残欠として記録するものがある¹⁾が、法華寺には平安時代後期の薬師如来坐像²⁾が伝わることから、この薬師如来像に関わる作品として捉えたものと推測される。この記録から大正元年の段階では、この2体の明王像は法華寺に伝わっていたものであることもわかる。本稿では、本作品の調査³⁾を踏まえ、2体の尊像について現状の記録と作品検討を中心にまとめていきたい。

1. 2体の明王像の基本情報

まずは、2体の明王像の法量、形状、品質構造、保存状態を記述する。三面の明王像を明王像(その1)、一面の明王像を明王像(その2)とする。

■明王像(その1)

像高 42.1cm

最大幅 12.8cm

頭頂-顎下 6.6cm

面幅(本面) 5.0cm (左脇面) 2.6cm



明王像(その1)正面

* 文化情報学部 文化情報学科



明王像（その1）右斜側面



明王像（その1）左側面



明王像（その1）背面



明王像（その1）正面上半身

稲沢市・法華寺所蔵の2体の明王像について

(右脇面) 3.0cm

面奥 5.9cm

胸奥 (左) 5.3cm (右) 6.1cm

腹奥 7.6cm

(※数値はすべて現状)

檜材の一木造。

面数は三面、臂数はすべて欠失するために不明。

上半身に条帛，下半身に裙・腰布をつける。

右膝を曲げ，左足を伸ばす。

現状は像全体に及び表面は摩耗するが，着衣の輪郭線や衣文線は残る部分もある。腕のすべて，左膝以下，右足先を欠失する。表面の彩色などはすべて剥落する他，木材はシバンムシによる食害を受けている。

■明王像 (その2)

像高 41.2cm

最大幅 10.3cm

頭頂-顎下 8.5cm

面幅 5.7cm

面奥 5.8cm



明王像 (その2) 正面



明王像 (その2) 右側面



明王像 (その2) 左側面

胸奥（左）6.4cm（右）6.2cm

腹奥 7.4cm

（※数値はすべて現状）

檜材，一木造。

面数は一面，臂数はすべて欠失するために不明。

上半身に条帛，下半身に裙・腰布をつける。

右膝を曲げ，左足を伸ばす。

明王像（その1）と同様に，現状は像全体に及び表面は摩耗するが，着衣の輪郭線や衣文線は残る部分もある。腕のすべて，左足の付け根以下，右足先を欠失する。表面の彩色などはすべて剥落する他，木材はシバンムシによる食害を受けている。



明王像（その2）背面



明王像（その2）正面上半身

以上の写真を見てもわかるように現状は損傷部分，朽損部分が多い状態である。しかし，各像の裙の表現を見ると翻る裙裾の表現や布に生まれる襞の流れをあらわす彫刻面は現状でも見ることができる。また，明王像（その2）の背面の着衣のようすも形状がよく残っている。両像ともに同時期の一具の作品であり，制作年代は，平安時代後期（12世紀）に位置づけられる。



明王像（その1）右脚



明王像（その2）右脚



明王像（その2）背面

2. 2体の明王像の尊名同定

2体の明王像は同時期の一具の作品と考えられることから、当初は五大明王、あるいは四大明王をなす作品であったと考えられる。

五大明王像も例外的な像容を示す尊像を含む場合もあるが、一般的な尊像構成を考えた場合、法華寺に残る2体の明王像は、現状、左右の脇面が確認できる明王像（その1）は、東方・降三世明王もしくは北方・金剛夜叉明王の可能性が考えられる。後頭部にもう一面



明王像（その1）左右脇面



【図版2】明王像（その2）後頭部

あらわされていた可能性もあるが、現状、背面は頭頂部から背中にかけて損傷しており判断できない。現状で残る部分から、脇面の表現方法は、興福寺・阿修羅立像のように脇面を本面に融合させる形ではなく、東寺講堂の明王像のように個別に形作る頭部を本面の後頭部両側面に表現する形であることがわかる。

また、明王像（その1）の足の動きに注目した場合、この像が降三世明王であったならば大自在天を踏む左足を伸ばす可能性が高いと考えられることから、この三面の尊像は恐らくは金剛夜叉明王であろうと考えられる。

一面の明王像（その2）は中心・不動明王もしくは南方・軍荼利明王である可能性が考えられるが、左足を蹴りあげる姿勢であることを考えると軍荼利明王である可能性が高い。不動明王の中にも、「降三世様」の不動明王の

ように片足を蹴り上げる姿の図像がないわけではないが、五大明王像という群像を考えた場合、不動明王は坐像もしくは通常の立像の姿である方が一般的であろう。

明王像（その2）は後頭部が残っており、頭髪の輪郭線を確認することができる【図版2】。明王像（その1）は頭部が頭頂部に向けて三角形にあらわされており焰髪の形が若干残っている。明王像（その2）に見られる後頭部の造形から、これら明王像の頭髪は、細かな毛筋彫などをあらわさない簡素な平彫りであらわされていた可能性が考えられる。2体の明王像はともに面相部の造形や腕など当初の姿をとどめていない部分が多いが、各像の具体的な姿（イメージ）は【図版3・4】のようではなかったかと思われる。



【図版3】『別尊雜記』所収の軍荼利明王



【図版4】『図像抄』所収の金剛夜叉明王



【図版5】岩手・正音寺 四大明王立像のうち
(左) 軍荼利明王立像, (中央) 金剛夜叉明王立像, (右) 降三世明王立像

一木造の五大明王像として尊像の残存状態が近い作品としては、像高など造像規模の違いはあるが岩手・正音寺の四大明王像(平安時代後期)⁴⁾【図版5】や比較的近い規模の兵庫・城崎温泉寺の降三世明王立像、金剛夜叉明王立像【図版6】があげられる。

法華寺の2体は、現状の保存状態から美術作品としてその造形的価値を評価されることは難しいかもしれないが、稲沢市域における平安時代後期の五大明王信仰の存在とその具体的な造像を伝える貴重な資料と言える。

筆者は、拙稿「平安時代における五大明王の受容と展開の諸相—特に彫像作例を中心に—」⁵⁾の中で国内の平安時代の五大明王像を執筆時に把握していた範囲で紹介したが、当時情報を持ち合わせなかった作例もあり、その後も愛媛県・医座寺の降三世明王立像⁶⁾など追記すべき尊像を確認した。本稿で取り上げる2体も同様に追記すべき作例と考える。特に、稲沢市内には平安後期に遡る明王像はこれまで確認されておらず、愛知県内で



【図版6】兵庫・温泉寺
(左) 降三世明王立像
(右) 金剛夜叉明王立像

も不動明王以外で五大明王を構成する尊像の遺例として確認されている範囲では本像は古い作品と言える⁷⁾。

おわりに

この2体については文献資料などに特に記録が残らず、法華寺もしくはその前身となる国鎮寺(谷椿寺)の寺史の中でも特別に語られることはないようである⁸⁾。

例えば先の岩手・正音寺の四大明王像は七体の薬師如来(七仏薬師)とともに明治の初め頃までは白山社に安置されていたとされる。法華寺にも白山社があり(現在は日吉社に合祀)、白山信仰との関わりが見られることも共通点が見られる。

薬師如来も五大明王もともに鎮護国家の役割を期待された仏たちであり、法華寺がかつて国鎮寺という寺名を持っていたことは、これらの尊像が祀られたこととも関係があったのではないだろうか。法華寺が尾張国分尼寺の後継寺院であることは、発掘調査からは確証が見つからないが、曹洞宗に改宗する以前にはこのような尊像を祀る性格を持った密教寺院が前身寺院として存在した可能性は指摘できるだろう。この2体の明王像は、十一面観音菩薩立像や兜鍪毘沙門天立像が残る船橋町の安楽寺⁹⁾も含め、この地域に存在した平安時代中-後期の密教文化を考える上で貴重な手がかりとなるものと考えられる。

本像のような形で見出される五大明王の遺例は、国内にはまだまだ存在するものと思われ、それらは文化財指定を受けていない形で寺社などに残されている可能性も高く、できるだけ損傷の少ない段階で記録を残すことが重要と考える。地域の文化財の悉皆調査などの機会を通して貴重な尊像が見出されるとともに、その情報が積極的に記録され、保存・活用されていくことを期待したい。

※掲載図版は【図版3・4】を除きすべて筆者の撮影によるものである。【図版3・4】の出典はともに『大蔵経 図像部三』である。

注

- 1) 宮田伊重『国分寺の研究』(大正元年)の「国分尼寺に関する見聞雑録」に「(三)今の法華寺、十二薬師の非常に腐朽せる佛像を所蔵す。」という記録があることが、『新 修稲沢市史資料編四地誌上』(昭和57年) p. 123に見られる。
- 2) 地域文化・仏像バーチャルミュージアム 稲沢市仏像シリーズ⑩ 法花寺町・法華寺 木造薬師如来坐像を参照のこと。 <http://bjvm.ci.sugiyama-u.ac.jp/worklist/>



- 3) 筆者は椋山女学園大学文化情報学部教授・柘窪優二氏と共同で制作している映像作品である稲沢市・仏像シリーズでの木造薬師如来坐像の撮影時にこの尊像をはじめて拝見した。この2体を含めて寺院で管理されている仏像の燻蒸処理に合わせて、稲沢市の文化財収蔵庫において法量の計測などをさせて頂いた。

稲沢市・法華寺所蔵の2体の明王像について

- 4) 正音寺像は現在、正音寺境内の収蔵庫に同時期の毘沙門天立像とともに安置されているが、明治時代初めまで赤沢薬師堂の七仏薬師立像とともに白山社に祀られていたとされる。カツラ材の一木造で1メートル前後の大きさである。すべて現状での法量となるが降三世明王は107.3cm、軍荼利明王立像は94.8cm、大威徳明王立像は107.3cm、金剛夜叉明王立像は96.4cmである。城崎温泉寺像（現・城崎美術館に展示）は、降三世明王が47cm、金剛夜叉明王が46cmほどで法華寺の2体よりもかなり簡素な造形である。
- 5) 津田徹英編『仏教美術論集2 図像学Ⅰ-イメージの成立と伝承（密教・垂迹）』（竹林舎、2012年）、pp. 143-168所収。
- 6) 医座寺所蔵の降三世明王立像は、2012年2月18日に拝観した際には修理が行われた後の像容であったが、松山市教育委員会より修理前の写真資料を閲覧する機会を得た。
- 7) 愛知県内で古い五大明王の作例としては、豊川市・財賀寺の五大明王像（室町時代）が確認でき、不動明王以外で五大明王を構成する一尊像の古い作例としてはあま市・自性院の大威徳明王騎牛像（平安時代後期/12世紀）があげられる。法華寺の近隣の作例では、絵画作品ではあるが一宮市萩原町の長隆寺に伝わる五大尊画像（室町時代）がある。
- 8) 法華寺のある場所は尾張国分尼寺址とされるが、発掘調査を通じた遺構、遺物を伴う明確な証拠は発見されていない。法華寺はまた、尾張国分寺の奥の院という位置づけも見られる。
- 9) 船橋町・安楽寺の十一面観音菩薩立像と兜跋毘沙門天立像については、地域文化・仏像バーチャルミュージアム 稲沢市仏像シリーズ⑥・⑦を参照のこと。<http://bjvm.ci.sugiyama-u.ac.jp/worklist/>